

大谷大学のシンボル尋源館（旧本館）の研究

はじめに

大谷大学の門をくぐり抜け、構内に入ると尋源館（旧本館）（1981年まで「本館」と呼ばれ、それ以後は「尋源館」と命名された）という西洋風の洒落た建物が目につく。外観は煉瓦造で、棟上には塔が載っている。誰もが尋源館を目にした時、大谷大学の歴史や尋源館という建物の魅力、奥深さを感じ、「ここは仏陀や親鸞の思想を学ぶ仏教の大学なのか」と感慨深く思うことであろう。

尋源館はかつて、玄関を入ると、左に学長室や事務室、右に教員室、会議室などが並び、2階には研究室などがあり、まさに「本館」と呼ぶにふさわしく大谷大学の中心的な建物であった。

当時の尋源館は今よりも増して威厳、権威があった。学長室があったということも挙げられるが、南条文雄、佐々木月樵、西田幾多郎、上田敏、西谷啓治、鈴木大拙、荒木俊馬という錚錚たる教員が教壇に立っていたからである。今でこそ誰もが自由に出入りし尋源館での授業を受けることができるが、当時は上級生、大学院生になるとやっとのことで尋源館での授業を受けることができたのである。尋源館での授業を受けることは、自分が成長し、進級していくことを示す「バロメーター」であった。¹

尋源館は2008年で築95年を迎える。95年間、大正、昭和、平成と激動の時代を通して大学の様子、時代の流れを見つめながら、塔を仰ぎ見る幾多の大谷大学の学生、教職員を暖かく見守り続け、今日に至っている。

尋源館は大谷大学の歴史と伝統を振り返り、真宗大学から続く建学の精神を忘れないための重要な建物であり、大学の「シンボル」として位置づけられている。人々は、今日に至るまで尋源館を愛し続け、大切

にしてきた。

しかしながら、尋源館は、大谷大学のシンボルであるにも関わらず、これまで、研究成果が非常に少なく、踏み込んだ研究がなされていないのが現状である。それは、建築当時の資料が少なく、当時の新聞（『京都日出新聞』、『中外日報』、『無盡灯』等）や尋源館の屋根裏にある棟札に詳細が記されていないからである。

尋源館の竣工から95年という節目を迎えるこの年に今後の尋源館の研究の参考になればと思い、卒業論文に尋源館を選び、尋源館のさまざまな謎を解明していきたいと思った次第である。

本論では特に、尋源館の立地条件、建築意匠、設計者・施工者、塔について明らかにする。

第1章 東京巢鴨の真宗大学移西と尋源館（旧本館）

第1節 真宗大谷大学本館の概要

本館の所在地は京都府愛宕郡上賀茂村字小山郷である。当時市電の終点であった烏丸今出川から北へ一望にひろがる洛北室町頭のこの地に、1912年6月に起工し、翌1913年11月に竣工した。

『無盡灯』（第18巻 第4号）（1913年4月1日）の「真宗大谷大学建築概要」で、本館について次のように記している。²

本館2階家建総煉瓦造建坪359坪玄関木鉄混造馬車廻シヲ設ケ本館床面天井距離階上階下共各12尺廊下ハ10尺5寸本館ハ北方ヲ廊下トシ階下ヲ教室教員室、事務室学長室及会議室ニ充用シ階上ヲ教室及研究室トセリ各室ハ南又ハ東方ニ面セシム天井ハ鼠害豫防又ハ防火用トシテ鋼板模様打出シ床ハ米利堅松ヲ使用シ採光並ニ換氣窓ハ硝子戸上ケ落シ階段ハ三ヶ所ニ設ク内部漆喰壁塗天井及木製^{ママ}ハペンキ

塗屋根瓦葺屋根塔並ニ避雷針ヲ設ク樋廻リ屋上空気抜窓被覆ハ銅版
ヲ使用セリ外部煉瓦見出トス

文中において、「本館ハ北方ヲ廊下トシ…各室ハ南又ハ東方ニ面セ
シム」とある。これは京都の気候を考慮した結果である。特に冬におい
て、暖かな太陽の光があたるように教室を南側や東側にし、廊下を北側
にしている。³ <資料 1 - 1> 又、真宗大谷大学の寄宿舍、真宗大学の

<資料 1 - 2> このような設計方法は、設計者の学生や教員に対する
思いやりが感じられる。

本館の建築様式は、ルネサンス式⁴である。『無盡灯』（第18巻 第
4号）の「真宗大谷大学建築概要」の序文では、「建物ノ様式ハルネサ
ンス式ヲ応用シ…」と記されている。本館を含め当時の真宗大谷大学の
校舎（本館、講堂、貴賓室閲覧室、図書館、寄宿舍、学生食堂炊事場浴
室、他）はルネサンス式を応用した建築意匠であることが読みとれる。

序文の後、各校舎の詳細が記されているのだが、講堂、貴賓室閲覧
室の建築様式は「本館ニ準ス」と記されている。しかし、図書館、寄宿
舎、学生食堂炊事場浴室の詳細欄では、建築様式は序文のルネサンス式
に加え、「日本式」と記されている。ここからわかることは、本館、講
堂、貴賓室閲覧室の建築様式はルネサンス式のみを採用しているが、図
書庫、寄宿舍、学生食堂炊事場浴室は、ルネサンス式と日本式を混合し
た、「和洋折衷式」の校舎である。

本館をはじめとする校舎の配置は、当時の設計者の工夫が見られる。
キャンパスには「中心軸」を設定し、正門、本館出入口、本館、講堂、
図書館・閲覧室を結ぶ渡り廊下、南寄宿舍・北寄宿舍を結ぶ渡り廊下、
北寄宿舍と食堂を結ぶ渡り廊下が一直線上に正確に並んでいる。校舎を

単にキャンパスの至る所に配置せず、「整然としたプラン」のもとにキャンパス全体が設計されている。<資料 1 - 1 > キャンパスにおいて中心軸を設定している大学は他に、旧京都帝国大学がある。同大学では、正門から本館（時計台）入口、文学部教室及研究室入口、理学部化学教室入口へと続く線を中心としたキャンパス形成がなされている。⁵ <資料 2 >

第 2 節 建築の経緯

大谷大学の歴史は1665年の東本願寺による学寮創立にはじまる。その後、変遷を経て、1896年、大谷派の学問所であった学寮は、その学問体制と内容とが、時代の人材養成の実情に合わなくなっていたので、「真宗高倉大学寮」と「真宗大学」とに別けられ、大谷派宗門の若き学徒は真宗大学で教育するという方向が決定された。⁶

西洋文明、なかでも科学的思潮が流入してくるなかにあって、宗教的信念をもつ人材を養成することは至難であるけれども、これこそ宗門の重大な責務であり、これに宗門の全勢力を投入すべきであると確信する清沢満之は、真宗大学を東京に移すべきだと建言した。又、清沢は、常々若い学生の教育は自由進取の気に溢れる東京で行うべきであると考えていたのである。遂に1899年10月16日、議制局会議において東京移転が決定され、清沢はその任を当たることを命ぜられた。その後、文部大臣に東京移転を認可され、1901年10月13日に真宗大学開校式が東京の巢鴨において挙げられた。⁷

真宗大学の学風は、真宗高倉大学寮の江戸時代以来の伝統的な教育法である安居を中心としているのに対し、浄土真宗の名のもと、職業的な僧侶養成機関という以上に、自由な雰囲気の中で各人を主体的な人

格として育てることを目指した。つまり、真宗大学は教育機関、真宗高倉大学寮は宗義の統一およびその教導機関という役割分担がなされて出発したのである。

しかし、その教育機関である真宗大学の「学風」は、真宗高倉大学寮から見ると「一宗安心の統一」をおびやかすものであった。学寮派は、相承の宗義をおろそかにしていることを嘆き、真宗大学の自由な考究の学風が確立してくるのを目の当たりにし、危機感を強めた。「宗義の統一」という視点から見たとき、それは「おもしろからぬ」ものとなってきたのである。このようにして1901年から東西の激しい対立が続くこととなる。⁸

東西の激しい争いが続く中で、1911年、真宗大学の入学者が激増し、一学年だけでも80名を越していた。一方で、学寮の方は学生が集まらず、卒業生はわずか12名、在学中の者はわずか7名であった。このような現状の中で、いっそうのこと京都の学寮を廃校にし、東京の真宗大学へ統一するという案が出てもおかしくない状況であった。しかし、突如として「真宗大学の京都移転」という声が高まる。

真宗大学の京都移転説

いかなる方面より起こりたる声か知らざれども、一昨19日午後の議制会において東京真宗大学京都移転説はあらわれたり。事は前夜深更より運動を始め、某々二、三賛衆のごときはほとんど徹夜にて賛成者調印の運動に忙殺したり。翌朝に至り、そのまとまりたる色別を聞くに、関東所属20名、関西所属30名、東にも西にも附かざる中立派8、9名という形勢なりし。実に突然の出来事のごとくなれども、それここに至らしむるまでには秘密の間に余程の準備ありたるもののごとし。（『中外日報』1910年12月21日）

この『中外日報』から、学寮派が真宗大学の「京都移転」実現のために必死に巻き返し工作をしていたことが読みとれる。この急な決定に対して、真宗大学側は反発をし、東西の激しい攻防が展開された。⁹

1911年8月26日、臨時議制局会議において大谷瑩誠寺務総長のもと、教学部長である大谷瑩亮は、「高倉大学寮」¹⁰と「真宗大学」を合して「真宗大谷大学」と改め、真宗中学とともに京都に置くという学校条例案を提出した。そして、1911年8月31日の本会議において、この条例案は、51名の委員出席のもと、記名投票により賛成26名、反対24名という僅差で可決され9月4日に発布された。¹¹

真宗大学を京都に移転させる理由としては、「宗義の統一」という理由の他に、本山の財政状況が原因として挙げられる。本山の財政は、真宗大学の東京移転を機に悪化したのである。真宗大学の一切の経費、例えば、校舎建築費、講師陣の莫大な給料を払っていた。だから、「余り多くない経費を二つに割くよりもこれを一つにして全力を傾注する方が得策」ということと、本山経営の教育機関であるから、「本山のお膝元に置くこと」、「本山との連絡が便利な京都に置くことが良い」といいうことに尽きるのであった。そして、京都に新たに建てるなら寄付をするという篤志家の声もあったのであろう。¹²

真宗大学側は、学監の南条文雄を擁して、本山から独立した大学を興すか話し合いをしたが、¹³結局、本山の命ずるままに1911年9月20日に真宗大学の閉校式が執り行われ、旧真宗大学を去った。ここに9年余りに及ぶ真宗大学の歴史は閉じられることとなった。東京の真宗大学の閉校式から20数日後、旧真宗大学は旧高倉大学寮と合して「真宗大谷大学」として、1911年10月13日に高倉魚棚の旧高倉大学寮の敷地に仮校舎として開校した。旧高倉大学寮の敷地に開校した真宗大谷大学は、腐

朽狭隘であり、学生たちは一日も早い校舎新築を本山当局に要請し続けた。¹⁴

第3節 建築地選定の諸問題

1911年10月13日、高倉の仮校舎にて再出発をした真宗大谷大学に関し「本山は直ちに新校舎設立の事務を開始」し、新校舎建設地をどこにするか協議した。

新校舎建設地は「候補地78ヶ所」（『中外日報』1911年12月9日）の中からいったん「妙心寺畔と白川の両地」（『中外日報』同年12月28日）が候補地として浮上する。その後「真宗大谷大学建築用地を京都府下愛宕郡上賀茂村字小山（京都府上京区鞍馬口通室町頭）に定む 明治44年12月31日 寺務総長 大谷瑩誠」（『宗報』第124号）とあり、結局「40余ヶ所の候補地より選抜し、京都市上京区鞍馬口通り室町頭に長方形の地所10500坪を相し、此程既に木標を立てたり」と現在地に決定している。¹⁵

結果的には真宗大谷大学の校舎建設は上賀茂村字小山に決まったわけであるが、候補地のひとつとして、旧近鉄百貨店京都店（かつては東本願寺財団の土地であった）も候補として挙がっていた。一般的な考えとして、本願寺経営の教育機関であるから本願寺のそばに大学を置くのが普通である。（現在の龍谷大学は1902年、東京高輪に「高輪仏教大学」を開学した後、1904年に何らかの理由で閉校し、京都の仏教専門大学と合し「仏教大学」として、西本願寺境内の大宮学舎に大学の地として再出発している）¹⁶しかし、結果的には現在地に決定している。なぜ、烏丸通や北大路通もなく、人家もまばら、田畑しかない京都でも「闇の地」であった小山に校舎の建設地として候補が挙げたのは、南

条文雄、佐々木月樵をはじめとする旧真宗大学の教員が「本山の影響
力」を少しでも避けたかったという理由が挙げられる。¹⁷

ともかくも小山に校舎の建設が決定した。名畑崇先生の次の記述が
参考になる。

東本願寺が大学の用地を北の方に求めているという話が上賀茂村小
山に伝わってきたのは、彼岸過ぎの頃であろうか。小山（村）では
内籐巳之助、内藤籐治朗、小林政治朗が村の発展をはかるため、大
学「誘致」の相談をまとめて村びとに協力を促し、一方で関係者に
進んではたらきかけたようである。（『キャンパスメモランダム』
p. 142）

小山における大学誘致は、内籐巳之助、内藤籐治朗、小林政治郎が
中心となって進めた。本山がこの地に大学用地を定め、また取得でき
たのは、この内籐巳之助、内藤籐治朗、小林政治郎の努力が非常に大
きい。¹⁸その理由としては小山村の発展をはかるといった理由だけではなく、
小山に「刑務所」を建設する¹⁹といった情報が村に飛び込んだからで
はないか。行政によって強行に刑務所を建設される前に大学を建設し
ようという考えだったのであろう。しかし、村人の中には「百姓が土地を
手放してどうするのや、安くは売らぬ」土地の譲渡を頑に拒む者もいた。
とりわけ鞍馬口通から大学の南正面に敷設する、通用路の買収は手間ど
った。幅三間（けん）²⁰の道路を南北に通すと10枚余の田が削られた
り分断されてしまうからである。内籐巳之助と小林与之助は、「芝居小
屋を建てるというのならともかく将来村の発展と学校に役立つ事なの
だから」。と言い、田は絶対に譲らぬ、と頑張る相手と三晩にわたって交
渉を重ねた。結果、最後に内藤氏が自分の所有地の中から、代替地を自
由に選ばせて提供するというこで話がついたようである。²¹

『中外日報』は次のように伝える。

大谷大学 1坪5円にて購入

東本願寺大谷大学にては、旧冬上京区新町頭にて買入れたる敷地は10500坪にして、1坪金5円宛にて、合計52500円にて相談まとまりたるものの由は既記せしが、該敷地は京都電鉄（後の京都市電）下立売にて下車してそれより約20町ばかりにして達し、鞍馬口より3、4町にして到る所なるが、つまり市中より離ること3、4町なり。東京巢鴨の旧真宗大学に比すれば市中に接すること近けれどもやはり京都の巢鴨たる称は免れじ、東京真大（真宗大学）の敷地は合計7000坪に過ぎれば、今回10500坪は非常に広きものなり。（『中外日報』1912年1月15日）

大学の地として定めた小山は、風光明媚の地であり、京都から近からず遠からず、東本願寺との連絡がさほど不便ではなく大学の地としては最適な場所である。しかし、合計52500円という金額は、決して少ない額ではない。²²

教育に理解があり大学「誘致」に熱心だった内藤籐治朗は、植物園の開設と紫明小学校建設に際しても用地集めに力を尽くしている。²³

第2章 尋源館（旧本館）の建築史的位罫

第1節 尋源館（旧本館）の立地条件

本館が建っている場所は、真宗大谷大学のキャンパスの中で、南寄りに位置している。本館の玄関は南を向き、正門も南に位置し本館の玄関と向かい合って立っている。本館の花崗岩の装飾、真宗大学から続く紋章も南面に施されている。その理由は大学周辺は当時、人家がまばらで、北大路通がなく烏丸通も今出川までであった。市電烏丸線も当然の

ことながら今出川が終点であった。1923年10月、市電烏丸線が今出川から上へ延長されるまでは、学生や教職員は、今出川に下車し、今出川から室町通まで向かい、室町通から大学正門まで続くまっすぐな8間幅、長さ200余間、両側に風致樹を植え込んだ大学の専用道路（さくら道）を徒歩で利用し、大学を行き来していた。<資料3> 当時はそれしか交通手段が無かったのである。つまり、その方法で大学に行き来していた学生や教職員、来客に対して本館の正面が見えるように配置し、真宗大谷大学であるということをわかるようにしているのだ。本館は当時の大学周辺の交通事情、土地事情を考慮した結果の配置だったのである。

本館はゆとりを持って配置がなされている。正門から25メートル程度引いた所に本館が建てられている。これは、来客の人力車置き場というキャンパス活用の他に、正門から本館の正面部分（塔を含めて）を見せるという演出を考えて、「遠近法」を設定している。<資料4>

このような遠近法は、明治期の役所においても見ることができる。役所に関しては、敷地の前に広い道路をつくり大きな門を建てる。それからズーッと引いたところに庁舎をドンと真ん中に配置する。これは、人を支配する建物であるから建物に威厳をもたせるためにどうしても必要だったのである。広場を通過してその建物に入るという演出をしたかったのである。²⁴ 学校建築においても同様で、学校の中心的な校舎である本館に威厳を持たせるために遠近法を設定している。学校建築は、役所ほどの威厳には欠けるが、真宗大学の教場、旧第四高等中学校本館、旧第五高等中学校本館、京都大学時計台、奈良女子大学記念館においても見られる。

第2節 尋源館（旧本館）の建築意匠

本館の特徴は、ルネサンス式を応用した建物で、煉瓦造り2階建て、屋根は寄棟造²⁵で瓦葺、棟上に塔を載せている。屋根は単調とならぬように空気孔を設け、中央正面、窓の上部、胴蛇腹、軒蛇腹（「胴蛇腹」「軒蛇腹」は<資料5>にて解説）には花崗岩や白大理石を用いてアクセントにしている他、上下・左右に並ぶ窓のしつこさをやわらげている。

正面中央は、壁面をわずかに突出させ、ダッチ・ゲブル²⁶ <資料6>を採用し、正面中央上部には真宗大学から続く紋章が花崗岩に刻みこまれている。

本館の形状は左右対称である。北側中央は階段室を突出させ、東西両端は北側に折り曲げており、平面形状は正面90メートル、側面20メートルで東西に長いE字型を成している。²⁷

本館の窓に関しては、教室が面している南側や東側は窓の数が多いが、廊下が面している北側は窓の数が少ない。これは、第1章、第1節において先述したように京都の気候を考慮し、南・東側に教室、北側に廊下を配置しているからだ。冬の寒い時期に太陽の光がよくあたるように教室が面している南・東側に多く窓をとり、北側は北風があまり入らないように、窓を少なくしている。²⁸ <資料7>

本館のような赤煉瓦造2階建てで、花崗岩、白大理石を所々に使用し、全体的に装飾が少なく簡素な学校建築は他にもある。現存する建物としては、旧第三高等中学校物理学実験場（1889年竣工）、旧第四高等中学校本館（1891年竣工）、旧第五高等中学校本館（1887年竣工）がある。 <資料8> これらの校舎の設計は、文部省会計課建築掛技師の山口半六と久留正道によるものである。（他にも旧第一、二、三、六、七、

八高等中学校本館の設計も手がけたが、関東大震災、米軍による攻撃、焼失などで現存しない)

本館の意匠に関しては、山口、久留が定着させた旧制高等中学校の校舎をモデルにしている。特に、1889年に大阪から移転開校した第三高等中学校、第三高等中学校の施設を引き継ぐ形で創設された京都帝国大学の校舎をモデルにしている。おそらく「(本山) 教学部長大谷瑩亮師は昨今毎日の如く各学校を巡視して校舎の構造等を研究」(1911年12月9日『宗報』)した成果であろう。『歴史を語る産業遺産・近代建築物—京都の近代化遺産—』p.125では、「文部省営繕は第三高等中学校、京都帝国大学の建設を通じて、1897年代には煉瓦造・木造それぞれの教育施設の定型を完成させる。私学の建築でそうした赤煉瓦のスタイルの流れを汲むのが大谷大学本館である」。と石田潤一郎氏は述べている。第三高等中学校の校舎、中でも赤煉瓦造りの本校<資料9>は、京都における正統的な西洋建築の先駆だった。赤煉瓦建築としては同志社に遅れるものの、鴨東の地に偉観を誇った。²⁹簡素でありながら力強く、見る者にとってまっすぐに伝わってくる第三高等中学校の赤煉瓦の本校に本山当局者は非常に魅力を感じ、その赤煉瓦の本校をモデルにして真宗大谷大学の本館の建設を命じたと推測できる。

本館は設計変更をしている。1912年6月18日の『京都日出新聞』に掲載された「大谷大学本館建面之図」や本館の設計段階図面を見ると、現状と違う箇所がいくつかある。一つ目は、塔がないこと、二つ目は、正面装飾の違い(2階の丸みをおびた窓、真宗大学の紋章がない)、三つ目は、車寄せの天井に装飾がある。四つ目は、正面玄関の扉にステンドグラスのような装飾が施されている。<資料10>資料でわかる通り、設計段階の本館は細部に及んで装飾が施されていたことがわかる。しか

し、本館竣工後の写真を見ると **<資料 4>** 設計段階図面において描かれていた、2階の丸みをおびた窓、車寄せの天井の装飾、正面玄関扉のステンドグラスのような装飾は無くなっている。その代わりに、本館の中央棟上には塔が載り、中央正面上部に真宗大学の紋章がいつの間にかある。これは推測にすぎないが、銅製の塔や、真宗大学の紋章の材料費、制作費に余分にお金がかかってしまうので、2階の丸みをおびた窓、車寄せの天井の装飾、正面玄関扉のステンドグラスのような装飾は頓挫したのであろう。

本館正面の上部には当初、紋章がなかったことは先述したが、いつの間にか設計段階図面において紋章が描かれている。 **<資料 1 1>** この紋章は元真宗大学の教職員の意向によるものとも考えられる。真宗大学の閉校という悲劇と憎しみを本山当局者に見せつけるかのように、真宗大学の紋章を構えさせるよう、設計者に伝えたのであろう。そこには、元真宗大学の学生や教職員の悲劇と憎しみが感じられるとともに、これから再出発する真宗大谷大学への強い意気込みが感じられるとも言えよう。

第3節 設計者・施工者について

本館をはじめとする真宗大谷大学校舎の設計者は『宗報』において記されている。しかし、誰が何の校舎の設計を担当し、どこの建設会社が施工を担当したのか詳しく記されていない。本館の屋根裏にある棟札には「上棟 大谷大学本館即位紀元貳千五百七拾三年六月三日」と記されているのみで詳細は記されていない。 **<資料 1 2>** つまり、本館の設計者・施工者がはっきりとしていない。

まずは、設計者で、

- 1912年 1月25日付けの『宗報』では、「建築は京大講師清水技師に囑託して目下設計調査を急ぎ居り、右終わり次第早々に着手の筈なり」
- 1912年 6月25日付けの『宗報』では、「同大学建築事務所にありては、松任外次郎氏主任となり、須藤勉、山本八太郎、春山定松、田中善太郎、東野紋之助、岡本年吉ら十余名の諸氏、専ら製図中なりしが、すでにその設計全般を整頓し、いよいよ建築の機熟したれば、本月十三日、同事務所を上御霊西通鞍馬口二丁目に移転し、その緒を開きたり」
- 1912年 8月25日付の『宗報』では、「京都帝国大学講師清水技師の設計に拠り、松任外次郎氏を建築主任として…」

1912年 1月25日付と同年 8月25日付の『宗報』において「清水技師」と記されているが、なぜか清水だけの名が明らかにされていない。

この清水技師は、『宗報』で記されている通り、京都帝国大学の講師であった。『京都帝国大学一覽』（自明治44年 至明治45年）p.79の理工科大学職員のページに土木工学教室・「土木行政法」の講師に「清水保吉」（岐阜）、土木工学教室・「道路」の講師に「清水瀨」（京都）が記されている。両者は同じ苗字であり、同じ土木工学教室に身を置いていた。『宗報』に清水の名を記していれば両者のどちらかを断定できるのであるが、記されていないため両者のどちらが真宗大谷大学の校舎建設に関わったのかを断定できない。

名が謎のままではあるが清水という人物の職業は明らかだ。『京都帝国大学一覽』に記されている通り、「土木関係」の講師をしていた。1912年 1月25日付けの『宗報』において、「建築は京大講師清水技師に囑託して目下設計調査を急ぎ居り右終わり次第早々に着手の筈なり」と

記されている。「設計調査」とあるので、清水技師は真宗大谷大学校舎建設地の「地盤調査」にあたった人物であると推測できる。実際に校舎建設時（博綜館、講堂、響流館）に、発掘調査を実施したところ、古い土の上に新しい土が盛られていることが確認されている。³⁰大谷大学のキャンパスは南北の高低差が激しいため、清水は高低差の激しいキャンパスの「地ならし」をしていたと推測できる。

『キャンパス メモランダム』p.38, p.45では本館の設計者に「清水技師」と述べられており、いかにも清水技師が本館の「製図」をしたと見受けられるが、以上の調査結果から清水技師が本館を含めて校舎の「製図」をしたというのは誤りである。

本館の設計者は、清水技師ではないということが以上の調査によりわかった。残りは松任外次郎以下と考えられる。『京都の赤レンガ―近代化の遺産―』p.114では本館の設計者に『宗報』で紹介されている須藤勉、山本八太郎の二者のみを挙げている。又、『京都の近代化遺産―歴史を語る産業遺産・近代建築物―』p.165においても同様である。

しかし、大谷大学総務課に保管している本館の設計完成図面（青写真）や、1912年6月18日付の『京都日出新聞』に掲載された「真宗大谷大学本館建面之図」には、書籍において設計者として紹介している須藤勉、山本八太郎の捺印はないが、主任として紹介されている松任外次郎の捺印はある。³¹ **<資料13>** 須藤と山本が本館の設計をしたのであれば両者の捺印があるはずだが、なぜか捺印がない。（須藤、山本以外の設計者の捺印も無い）本当に、須藤と山本が本館の設計を担当したかは明らかにすることができなかった。しかし、数十人という設計者がいる中で、松任一人が本館の設計をしたというのは考えにくい。数々の書籍に記されている結果から須藤、山本が本館の設計に関わり、残りの設

計者は他の校舎（講堂、寄宿舍、図書館…）の設計をして、役割分担をして校舎の設計をしていたと推測できる。

松任は『宗報』において、「主任」、「建築主任」として紹介されている。推測にすぎないが、松任は大学校舎設計のリーダーであり、全体をまとめる「総轄責任者」であったのであろう。須藤、山本が本館の設計を完成させた後、松任が最終チェックをし、自身も何らかの手を加えて捺印したのであろう。（他の校舎も本館と同様に、それぞれの設計者が校舎の設計を完成させた後に松任が最終チェックをして捺印したと推測できる）つまり、本館は、松任、須藤、山本の三者による作品であると考えられる。主任である松任は、旧奈良女子高等師範学校本館（奈良女子大学記念館）の設計にも関わっている。奈良女子大学記念館の設計図には「山本治兵衛」と「松任外次郎」の二者の捺印があることから二者が協力して奈良女子大学記念館の設計をしたことが断定できる。

<資料 1 4> 実際に奈良女子大学記念館と本館を見比べると外観はほとんど似ていない。共通点といえば、寄棟造、瓦屋根、奈良女子大学記念館の下部の赤煉瓦である。特に棟上に載っている塔は本館の塔と実に酷似している。 **<資料 1 5>** 松任が奈良女子大学記念館の設計を手がけたことは、明らかになったが、その人物の出身校、職場、人となり、思想、他に手がけた建築物を明らかにすることができなかった。石川県旧松任市（現在の白山市）に問い合わせしてみたが、苗字と地名が一致するのみであった。奈良女子大学に問い合わせても、山本治兵衛のことはわかるが、松任の詳細は全くわからないとの回答を受けた。同大学では、奈良女子大学記念館の設計図に松任の捺印があるのにも関わらず、松任の詳細が明らかでないので、記念館の設計者には「山本治兵衛」のみを挙げて紹介している。

松任の他、1912年6月25日付けの『宗報』において紹介されている、山本八太郎、春山定松、田中善太郎、東野紋之助、岡本年吉、名が全く謎である十数名の設計者も松任同様に明らかにすることができなかった。しかし、須藤勉に関しては、多少なりとも明らかになった。旧京都帝国大学の建築工事は、文部省直轄で行われていた。1907年5月23日に同大学に建築部が設置され、自立したキャンパス形成に取りかかることとなり、以後、建築部は、1919年12月17日に建築課、1920年1月9日に営繕課に名称を変更するのであるが、須藤勉は、その建築課、営繕課に属し「技手」として、同大学のキャンパス形成に関わっていたことが明らかとなった。³² <資料16>

最後に、施工者に関してだが、本館の屋根裏にある棟札に、設計者と同じく施工者の詳細が記されていないので全く不明である。ただ、本館をはじめとする大学校舎の設計に2名（清水技師、須藤勉）の旧京都帝国大学の職員が関わっていたことから、旧京都帝国大学の職員や文部省営繕の関係者が係わっていたとも考えられる。松任が設計を手がけた奈良女子大学記念館の工事は「文部省建築課」と紹介している。

そもそも西洋建築というのは、日本が明治になって入ってきたものである。明治政府が他国に日本の「近代化」を見せつけるために、官庁、学校、駅舎とあらゆる建物において西洋化を強力に推し進めてきた。つまり、本館の施工者は（設計者も含め）必死に日本の近代化を推し進めた「国の官僚」ということが推測できる。

他に施工者を明らかにする手がかりとして本館の屋根裏にある棟札とは別に、大谷大学に保管している棟札を参考にできる。そこには、「奉上棟 大正拾三年 九月二十三日」と墨で書かれ、諸職工、設計監督の「佐藤仙吉」、棟梁の「杉岡利平」、大工肝煎の「斉藤郁太郎」等の

名が詳しく書かれている。<資料 1 7 > この棟札に書かれている年代からして、本館とは直接関係ないが何らかの参考にできよう。

第 4 節 塔の謎

1912年 6 月 18 日付の『京都日出新聞』に、本館の完成予想図である「真宗大谷大学本館建面之図」が掲載されているが、その図には塔の姿は見えない。<資料 1 3 > 大谷大学真宗総合研究所に『京都日出新聞』に掲載されたのと全く同じ「設計段階図面」が現存するが、そこには本館正面のみに、鉛筆で塔を追加した形跡を見ることができる。<資料 1 8 > おそらく、『京都日出新聞』に掲載された直後、本館に塔を付けるという発案がなされたのであろう。追加した塔には現状の塔とは異なり、全体的に装飾が華美である。避雷針は装飾が施され、塔の 4 本の列柱にも、コリント式^{3 3}と呼ばれる装飾が施されている。後に鉛筆で追加された塔は実用的ではなく、本館における装飾として塔を追加したことがわかる。他の図面では、装飾としての塔の他に、現状の塔に時計が付いた時計塔がある。その時計塔も避雷針には装飾が施され、4 本の列柱にはコリント式の装飾が施されている。<資料 1 9 >

後に鉛筆で追加した装飾が華美な塔、塔に時計が付いた時計塔の他にも塔の図面が存在する。その図面は、他の設計図の裏面や空いているスペースに描かれており、どのような塔にするのか設計者が大変、苦心していた様子が伺える。<資料 2 0 >

真宗大谷大学校舎の図面は先に述べた「設計段階図面」と「設計完成図面」（青写真）の 2 種類がある。

本館の設計完成図面（青写真）の塔の図面を見ると、設計段階図面において後に鉛筆で追加された装飾が華美な塔や、時計塔、他の設計図

の裏面や空いているスペースに描かれている塔ではなく、現状の装飾が少ない簡素な塔が描かれている。最終的にその塔を載せることに決定したと断定できる。<資料 2 1> 大学側か設計者の意向かわからぬが、本館の装飾としての塔にするのか、実用的な時計塔にするのか熟慮したのであろう。おそらく、当時は時計が非常に高価であったことや、本山の資金不足が要因で時計塔は頓挫したのであろう。

いつの間にか本館に追加された塔であるが、塔の用途に関して、記述や意見がさまざまである。『歴史を語る産業遺産・近代建築物—京都の近代化遺産—』p.165では「尋源館は…棟上に鐘楼を載せている」、『京都の赤レンガ—近代化の遺産—』p.113では「屋根の中央にはヨーロッパの教会堂のような金属製の尖塔が立っている。本来これは鐘塔として設けられたものであるが、いま鐘はない」、『大谷大学広報』(NO.142秋) pp.20で大谷大学の名誉教授である佐々木令信氏は本館の塔について「鐘楼」、「鐘なき鐘楼」と記述している。本学の出身者である、畠中光享氏は「中央部分の尖塔は鐘楼のように見える。第一寮歌には“聞け暁の鐘は鳴る”、第三寮歌には“時に理想の鐘をつく”と歌われていたのだが、鐘が写った写真は見たことがない。以前は鐘があったということを知り…」と述べている。^{3 4}

『金閣寺』（1956年）で三島由紀夫は、本館の塔を次のように叙述する。

玄関の屋根の頂きに、青銅の櫓がそそり立っているが、鐘楼にしては鐘が見えず、時計台にしては時計がない。そこでその櫓は、繊細い避雷針の下に、空しい方形の窓で青空を切り抜いているのである。と述べており、誰もがあの塔を目にすると「鐘なき鐘楼」、「時計無き時計塔」としてイメージしているようである。

実際に私自身、塔に上り、塔に鐘や時計を付けるための装置があるか調査をしたところ、塔の内部の天井は全面板張りで、鐘や時計を付ける装置は全く無かった。＜資料 2 2＞又、塔の設計段階図面や設計完成図面（青写真）を見ても、塔に時計はあっても、塔に鐘がついている図面は全くない。

本館の塔と酷似している塔は他の学校においても見ることができる。それは旧奈良女子高等師範学校本館（奈良女子大学記念館）である。³⁵第2章、第3節において先述した通り、奈良女子大学記念館の設計図には「山本」と「松任」の捺印があった。＜資料 1 4＞山本は山本治兵衛で、松任は『宗報』において「主任」、「建築主任」として紹介されている、松任外次郎のことである。本館の図面にある松任の捺印と奈良女子大学記念館の図面にある松任の捺印を見比べてみると全く同じ捺印であった。つまり、松任は、本館の設計を手がけた他に、奈良女子大学記念館の設計も手がけたことが両大学の設計図を見て確認できる。両大学の塔は非常に酷似しており、且つ、設計者の松任が共通していることから両大学の塔は、松任の指示によって付けたと推測できる。

奈良女子大学においては記念館の塔のことを、頂塔（ランタン）³⁶として紹介している。本館の塔もどんな塔にするのか悩んだ結果、最終的に記念館のように、頂塔（ランタン）として完成させたのであろう。もし、松任が手がけた記念館の塔に鐘がかかっていたら、「なぜ本館の塔には鐘がかかっていないのか」と首をかしげてしまうが、記念館の塔にも鐘が無いのであるから本館の塔に鐘が無いことに納得ができる。

真宗大学で使用されていたとされる西洋鐘＜資料 2 3＞は本来、本館の塔にかけるものであったという意見があるが、³⁷その西洋鐘は、本館の塔には使用されず、現在の至誠館あたりに鉄骨で組んでいた鐘楼

にかけられていた。＜資料 24＞その鐘楼は時を告げるために使用していたのだという。本館の塔に西洋鐘が使用されず、鉄骨で組んだ鐘楼にわざわざ使用していたということは、本館の塔は鐘をかけるための塔ではないということだ。

以上の調査により、松任は「鐘楼としての塔」は全く考えていなかったことがわかった。だから、本館の塔を「鐘楼」と呼ぶのは誤りである。松任がどういった意図で両大学の塔を設置させたのかは謎であるが、奈良女子大学記念館の塔の紹介において、「頂塔」「ランタン」と紹介しているので、この2つのキーワードを参考にできる。

松任の指示によって付け加えられた塔は、松任の二つの「考え」によって塔が付け加えられたことが予想される。一つ目は、本館は学長室や事務室等があり、真宗大谷大学における中心的な校舎であるから、本館に少しでも「威厳」、「権威」を印象付けるために「頂塔」を付け加えたことが考えられる。二つ目は、灯がともった「ランタン」をイメージし、ランタンのもとで学生が勉学に励み、「知恵」、「ひらめき」、「真理を明らかにする」というイメージを基に塔を設置したのであろう。³⁸当時の日本は、学問研究の府であるべき大学が、学問の「真理性」よりも「国家に役立つ研究」、「国家に役立つ高級官僚や実業家の育成」を目指していた。³⁹松任はそのような「国家主義教育」に大変、疑問を抱いていたのであろう。松任は「国家に捧げる」ための大学ではなくて、学問の真理を明らかにすることを大切にしたいという願いのもとに、大谷大学や奈良女子大学に塔を設置したと考えられる。

塔がもし、時計塔や鐘楼になっていれば、実用的でありそれはそれで見過ごされてしまうが、頂塔（ランタン）としての塔はたくさんの設計者の思いがこめられており非常に奥深く、感慨深い。

第3章 学内における尋源館（旧本館）の変遷

第1節 尋源館（旧本館）の取捨選択

本館は、2号館（1978年竣工）竣工後において取捨の議論がなされた。2号館竣工の頃、本館は既に竣工から65年が経過していた。当時の本館の現状としては、外観は非常に美しいものであったが、内部は実にひどいものであった。普通に歩いていても床はブカブカし、雨が降れば雨漏りし、授業中は床が抜け落ちた。2階を研究室として使用することは既に不可能であった。書物の重みに耐えられなく、いつ床が落ちるか保証の限りではないと専門家は診察した。壁は所々亀裂が発生し、漏電が心配された。⁴⁰このように非常に老朽化が激しかったので、当時の急激な学生数、教職員数の増加や、研究と教育の態勢の変遷に適応し得ない状態であった。⁴¹

このような本館の現状において、「利用価値が無くなった本館なんて取り壊してしまえ」という革新論と「本館は絶対に残すべきだ」と保守論が出て、意見が対立した。⁴²教授会では、本館を取り壊して跡地に新しい校舎を建設することが決定した。又、本山においても、それはやむを得ないとし、本館を建て替えることに賛同した。⁴³本館を取り壊す要因としては、老朽化して使いものにならない本館があることによって、将来建てる新しい校舎の建設が制約されるからである。又、本館を保存する目的で改修しようとするると莫大な資金が必要だからである。そのような議論が出る中で同窓生においては、本館を取り壊すことに強い反対の意見を出した。⁴⁴やはり、本館があつてこそその大谷大学であり自分たちが学んできた学舎に愛着があるからである。その際、本館の解体・存続かについて「京都文化財保護委員会」に懸議、資料を提出し「できうる限り遺すように」との査定を受けた。又、京都大学の川上貢

教授に本館の現況調査を委託し文化財的な見地からの鑑定を依頼した。
45 その調査結果を受け大学側と川崎清を中心とする第1期学園総合整備計画の設計メンバーは本館を原型のまま保存し、博綜館と噛み合わせることを検討したが、法規上の問題46から両翼部をカットした。47

第2節 「本館」から「尋源館」へ

第1期学園総合整備計画竣工の際、各建物に名称が付けられることとなった。本館は、朋友館、正覚館、尋源館、覚樹館などの候補から尋源館が採用された。尋源の語は、中国の古典にも多く見られるが、近くは覚如の報恩講式に「酌流尋本源」（流れを酌んで本源を尋ねる）とあり、その文に依っている。48 旧本館が尋源という名称がつけられた理由としては、やはり、清沢満之の「開校の辞」、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」という建学の理念・精神、真宗大学から続く伝統を真新しい校舎を建てることによって決して忘れることがないようにという願いから、尋源という名称がつけられたのである。まさに、旧本館にふさわしい名称である。

第3節 尋源館（旧本館）の登録有形文化財化

1999年10月16日、文化財保護審議会は、近代建造物の保護を目的にした登録有形文化財に79件を登録するように求めた。

登録有形文化財は、京滋から大谷大学尋源館、藤井斉成会有鄰館第二館・収蔵庫（京都市左京区）の京都3件と、柏原宿歴史館主屋・展示館・収蔵庫・門（坂田郡山東町）の滋賀4件が答申された。

尋源館が登録された要因としては、1913年の建築であり、赤レンガに石の飾りをはめた明治調洋風建築に玄関ポーチと小塔を設けている。

破風（はふ）⁴⁹には、装飾を排し機能性を重視した大正期のセセッション様式の特徴がみられるからである。（『京都新聞』1999年10月16日土曜日より）

尋源館は、登録有形文化財に指定されたのに対し、奈良女子大学記念館、旧第四高等中学校や旧第五高等中学校は「重要文化財」に指定されている。このような差が生じる要因としては、建物の「保存方法」の違いによるものである。尋源館は1981年の第1期学園総合整備計画により両翼を解体した。外壁は竣工時のままではあるが、内部においては腰板、天井の鋼板、スタッコ（漆喰壁）を解体し竣工時の姿を全くと言っていいほど留めていない。（鋼板は中央玄関のみ現存している）1994年2月に奈良女子大学記念館の改修が行われたが、その改修を行うにあたって、同大学では、歴史的建造物の文化的価値を損なうことのないよう、細心の注意を払い設計、施工した。各工事にあたってはできるだけ当初の建築材料を再利用し、建築材料の取替えでは材種、仕上げを新しくするときは、形式、工法とも当初の方法を踏襲するように努めた。⁵⁰旧第四高等中学校や旧第五高等中学校も竣工当時のまま保存している。

尋源館も改修時は、奈良女子大学記念館のように工夫すべきであったらう。尋源館は、設計者や施工者の真宗大谷大学に対する「熱い意思」がこめられている。その熱い意思が形となって現れているのだ。それを簡単に解体することは尋源館を設計、施工した人たちの意思を簡単に壊すことになる。設計者、施工者の意思を尊重した改修がなされるべきであった。

尋源館は、保存の必要性や方法など、問題の難しさを改めて認識させられる建物である。

おわりに

大谷大学尋源館は、「謎が多い」という声を私が卒業論文にこの尋源館を選ぶ前から聞いていたが、実に謎が多かった。特に謎だったのが「設計者・施工者」、「塔」に関してだった。まず、設計者・施工者に関してだが尋源館の設計・施工を担当したのであれば、棟札や設計図に建設会社名や人物名など詳細を記すはずであるが、棟札には何も書かれていないし、設計図にも詳細が記されていない。名前が記されているのは、設計完成図面（青写真）、1912年6月18日付の『京都日出新聞』に掲載された「真宗大谷大学本館建面之図」の松任外次郎の捺印のみである。京都大学や奈良女子大学の校舎の棟札、設計図には、設計者・施工者の詳細が明確に記されている。尋源館の棟札、設計図とは全く対照的である。なぜ、尋源館の棟札、設計図に詳細が記していないのかは全く不明である。

しかし、調査結果により、尋源館の設計者は、数十人という設計者の中の中心的人物であったとされる松任外次郎、須藤勉、山本八太郎の三者が担当したと推測できる。なぜなら、書店において売られている数多くの書籍⁵¹において尋源館の設計者に須藤勉、山本八太郎と記され、設計完成図面（青写真）や『京都日出新聞』に掲載された「真宗大谷大学本館建面之図」に松任外次郎の捺印があるからだ。推測にすぎないが須藤、山本が本館の設計を完成させた後、建築主任であった松任が最終チェックをして何らかの手を加え、捺印したのであろう。なお、施工者に関しては有力な手がかりを得ることができなかった。

建築主任であった松任は、奈良女子大学記念館の設計にも関わっていることが明らかになった。設計図には、山本治兵衛と松任外次郎の捺印があった。松任の捺印は、本館の設計完成図面（青写真）や『京都日

出新聞』に掲載された「真宗大谷大学本館建面之図」にある捺印と全く同じであった。記念館の外観と尋源館の外観の共通点はあまり無いものの、棟上に載っている塔は実に酷似している。両大学の塔は、松任の意向によって付けられたと考えられる。

もう一つは尋源館の塔の「用途」のことである。塔は今日におけるまで、作家の三島由紀夫をはじめ、人々に「鐘無き鐘楼」、「時計無き時計塔」と呼ばれてきたが、それは誤りである。あの塔は鐘や時計を付けるための実用的な塔ではなくて、尋源館における「装飾」としての塔である。設計段階図面において、装飾が華美な単なる塔と、現状の塔に時計がはめこまれた図面があったが、何らかの理由で頓挫した結果、現状の塔となったのである。その塔の役割は、推測にすぎないが、当時の真宗大谷大学の本館の威厳をより一層増すためや、火が灯った「ランタン」をイメージし「知恵」、「真理を探究する」という意味がその塔には込められていると考えられる。

私は、重点的に尋源館の設計者・施工者、塔の調査を進めてきたが、有力な手がかりを得ることができず、推測が多い。これからの課題として、誰がどの校舎の設計をして、施工会社はどこで、なぜ、後に塔を追加したのかを『宗報』、『京都日出新聞』、『中外日報』等の新聞記事を熟読し、決定的な証拠となる情報を得なければならない。又、尋源館の設計・施工に多少なりとも関わったとされる京都大学に直接足を運び、建築の先生方に話を聴いてみるというのもひとつの方法である。

なお最後になったが、私の尋源館の論文が完成できたのは、大谷大学の先生方、職員の方々、京都大学の職員の方々、雪山康利さんをはじめとする学外の方々のおかげである。ここに改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

注釈

- 1 木村宣彰氏（大谷大学学長）のご教示による。
- 2 真宗大谷大学編纂・発行 1913年11月9日 『真宗大谷大学一覧』
「真宗大谷大学建築一覧」 p.145にも同様のことが記載されている。
- 3 兼修教室の一部は北側に面している。
- 4 ルネサンス式…煉瓦造りに多い。左右対称で中央に玄関を設ける。両翼を横に長く伸ばし、さらに伸びる場合は折り曲げるのが特徴である。
- 5 『京都大学百年史 写真集』 p.20から引用した。
- 6 『大谷大学広報』1982年10月8日 57-3号 pp.2-5から引用した。
- 7 『大谷大学広報』1982年10月8日 57-3号 pp.2-5から引用した。
- 8 『大谷大学百年史』 pp.242-244から引用した。
- 9 『大谷大学百年史』 pp.248-249から引用した。
- 10 真宗高倉大学寮は1907年2月21日に真宗高倉大学寮条例を廃止し、
「高倉大学寮」条例を定めた。よって学寮名も高倉大学寮に改称した。
- 11 『大谷大学百年史』 pp.250-251から引用した。
- 12 『大谷大学百年史』 pp.253-254から引用、参考にした。
- 13 『大谷大学百年史』 p.252を参考にした。
- 14 『大谷大学百年史』 p.262を参考にした。
- 15 『大谷大学百年史』 p.265-266から引用した。
- 16 <龍谷大学の歴史>
1639年 西本願寺学寮として創立
1879年 大教校落成（現・大宮学舎本館・南翼・北翼・正門）
1900年 学制を更改し、仏教大学・仏教高等中学・仏教中学の3種とする

1902年 仏教大学を仏教専門大学（京都）と高輪仏教大学（東京）とに分立

1904年 両大学を仏教大学（京都）に統合

1905年 専門学校令により「仏教大学」が認可される

<http://www.ryukoku.ac.jp/university/rekishhi/index.html>

「龍谷大学」より。

17 村松法文氏（大谷大学教授）のご教示による。

18 『真宗総合研究所研究紀要 14 1996』 p.9 から引用した。

19 雪山康利氏（大谷大学卒業生 現在、真宗大谷派寺住職・桃嶺保育園園長）のご教示による。

20 間（けん）…長さの単位のことである。1間は6尺（約 1.818メートル）。

21 『キャンパスメモランダム』 p.146 から引用した。

22 『大谷大学百年史』 p.267 を参考にした。

23 『キャンパスメモランダム』 p.149 から引用した。

24 『西洋館を楽しむ』 p.36 から引用した。

25 寄棟造…屋根の形式の一。四つの流れを組み合わせた屋根。（『広辞苑』から引用した）

26 ダッチ・gable…オランダ式切妻壁のこと。（『京都の赤レンガ—近代化の遺産—』 p.115 から引用した）平安女学院明治館も採用している。

27 『歴史を語る産業遺産・近代建築物—京都の近代化遺産—』 p.165 から一部引用した。

28 山口半六、久留正道が設計した旧第五高等中学校（熊本県）では、

熊本県の夏の暑い日差しから避けるため、教室は北側に配置し、北側に多く窓をとり安定した光が教室内にあたるようにしている。南側は、廊下を配置し、北側の窓よりも南側の窓は少なくしている。

<http://www.pref.kumamoto.jp/education/hinokuni/isan/kindaikaisan/kumadai/kumadai.html>「熊本大学関連施設」より。

²⁹ 『京都の赤レンガ—近代化の遺産—』 p.149 から引用した。

³⁰ 木場明志氏（大谷大学教授）のご教示による。

³¹ 他に、本館樋金物等現寸図、本館各入口及玄関詳細図、真宗大谷大学本館左右階段之図、真宗大谷大学建築階上平面図、真宗大谷大学本館図、真宗大谷大学表門及敷地前側鉄柵之図、真宗大谷大学本館天井伏之図、真宗大谷大学本館基礎及床配置図、真宗大谷大学所属尋源橋之図、貴賓室閲覧室事務室面図の設計完成図面（青写真）にも松任外次郎のみの捺印がある。

³² 『京都大学建築八十年のあゆみ 一京都大学歴史的建造物調査報告一』 p.31 から引用した。

³³ コリント式…ギリシャ古典主義三様式の一つ。古代のコリントから起こったもので、他の二様式（イオニア式・ドリス式）よりも後れて成立。ローマ・ルネサンス以降の建築にも用いる。アカサンスの葉を飾った華麗な柱頭が特色である。（『広辞苑』から引用した）

³⁴ 大谷大学同窓会無盡灯 無盡灯ギャラリー No.116 2001年12月「尋源」 <http://www.mujiinto-otani.org/>から引用した。

³⁵ 本館に酷似している塔は、奈良女子大学記念館以外に、司法省庁舎（法務省旧本館）1895年竣工、旧満州の奉天小学校 1908年竣工、長春小学校 1908年竣工、撫順小学校 1908年竣工がある。これらの建築物

の塔は本館の塔と酷似し、鐘や時計は付いていない。又、竣工年もほぼ同時期であり、外壁には煉瓦を用いている。このような建築意匠は、当時の流行であったのかもしれない。

³⁶ Lantan（ランタン）…ちょうちん、角灯のことである。（『広辞苑』から引用した）滋賀県の旧水口図書館（ヴォーリズ設計 1928 年竣工）にも屋上にランタンがある。ただし、実用的ではない。

³⁷ 木場明志氏（大谷大学教授）や雪山康利氏らの意見。

³⁸ 木村宣彰氏（大谷大学学長）、村松法文氏（大谷大学教授）のご教示による。

³⁹ 『大谷大学百年史』 p.172 から引用した。

⁴⁰ 『無盡灯』 1977 年 7 月（No.68） p.3 から引用した。

⁴¹ 『無盡灯』 1981 年 2 月（No.75） p.3 から引用した。

⁴² 『大谷大学通信 6』 昭和 52 年 12 月 1 日から引用した。

⁴³ 雪山康利氏（大谷大学卒業生）のご教示による。

⁴⁴ 雪山康利氏（大谷大学卒業生）のご教示による。

⁴⁵ 『無盡灯』 1981 年 2 月（No.75） p.4 から引用した。

⁴⁶ 消防法によるものと考えられる。

⁴⁷ 『歴史を語る産業遺産・近代建築物 一京都の近代化遺産一』 p.165 から引用。

⁴⁸ 『大谷大学広報』（57-2号）から引用した。

⁴⁹ 破風（はふ）…日本建築で、屋根の切妻についている合掌形の装飾板。また、それについている所。（『広辞苑』から引用した）

⁵⁰ <http://koto.nara-wu.ac.jp/kinenkan/> 奈良女子大学記念館「改修工事概要」から引用した。

5 1 『新版 日本近代建築総覧』、『歴史を語る産業遺産・近代建築物
—京都の近代化遺産—』『京都の赤レンガ—近代化の遺産—』など。

資料出典一覧

<資料 1 - 1> 『真宗大谷大学要覧』 1913 年。

<資料 1 - 2> 『無盡灯』（第 6 卷 第 10 号）。

<資料 2> 『京都大学百年史 写真集』 p. 20。

<資料 3> 『真宗大谷大学要覧』 1913 年。

<資料 4> 大谷大学企画課、稲垣淳造氏所蔵。

<資料 5> 大谷大学企画課、稲垣淳造氏所蔵。

<資料 6>

<http://kyoto-np.jp/kp/koto/kodawari/haikara/haikara31.html>

Kyoto Shinbun 「こだわり拾撰・洋館浪漫」より。

<資料 7> 上の写真；大谷大学企画課、稲垣淳造氏所蔵。

下の写真；私が撮影した。

<資料 8>

旧第三高等中学校物理学実験場；

<http://sano567.web.infoseek.co.jp/KYOUTORETORO/jidaiyun/jidaiyun.html>

「京都レトロ：建築年代順」より。

旧第四高等中学校本館；

<http://www.nanaoarchive.com/shashindemirunanaonorekishikennaikakuchi.htm>

「写真で見る七尾の歴史〈県内各地〉」より。

旧第五高等中学校本館；

<http://neko.koyama.mond.jp/?month=200707>

「吾輩は猫である 200707」より。

<資料 9> 京都大学文書館所蔵 許可をいただき私が撮影した。

-
- <資料 1 0 > 大谷大学真宗総合研究所所蔵。
- <資料 1 1 > 大谷大学真宗総合研究所所蔵。
- <資料 1 2 > 大谷大学総務課に許可をとり私が撮影した。
- <資料 1 3 > 『京都日出新聞』1912年。
- <資料 1 4 > 奈良女子大学所蔵。
- <資料 1 5 > 奈良女子大学総務課に許可をとり私が撮影した。
- <資料 1 6 > 『京都大学建築八十年のあゆみ 一京都大学歴史的建造物
調査報告一』p. 31。
- <資料 1 7 > 大谷大学図書館所蔵。
- <資料 1 8 > 大谷大学真宗総合研究所所蔵。
- <資料 1 9 > 大谷大学真宗総合研究所所蔵。
- <資料 2 0 > 大谷大学真宗総合研究所所蔵。
- <資料 2 1 > 大谷大学総務課所蔵。
- <資料 2 2 > 大谷大学総務課に許可をとり私が撮影した。
- <資料 2 3 > 大谷大学図書館に許可をとり私が撮影した。
- <資料 2 4 > 大谷大学企画課 稲垣淳造氏所蔵。

引用・参考文献一覧

- （不明） 1901年『無盡灯』（第6巻 第10号）（不明）。
- 舟橋水哉編 1913年『無盡灯』（第18巻 第4号）尋源会雑誌部。
- 真宗大谷大学編 1913年『真宗大谷大学一覧』真宗大谷大学。
- 京都大学広報委員会編 1977年『京都大学建築八十年のあゆみ 一京都大学歴史的建造物調査報告一』。
- 事務局長 加来玄雄編 1977年『大谷大学通信6』大谷大学。
- 無盡灯編集委員会編 1977年『無盡灯』（No.68）大谷大学同窓会本部。
- 無盡灯編集委員会編 1981年『無盡灯』（No.75）大谷大学同窓会本部。
- 無盡灯編集委員会編 1981年『無盡灯』（No.76）大谷大学同窓会本部。
- 大谷大学広報編集委員会編 1985年『キャンパス メモランダム』大谷大学。
- 大谷大学広報委員会編 1982年『大谷大学広報』（57-2号）大谷大学。
- 大谷大学広報委員会編 1982年『大谷大学広報』（57-3号）大谷大学。
- 大谷大学広報編集委員会編 2000年『大谷大学広報』（NO.142 秋）大谷大学企画室。
- 大谷大学広報編集委員会編 2007年『大谷大学広報』（NO.171 春）大谷大学企画室。
- 大谷大学編 1996年『真宗総合研究所研究紀要14 1996』大谷大学。
- 前久夫・日向進編 1997年『京都の赤レンガ 一近代化の遺産一』京都新聞社。
- 京都大学編集委員会編 1998年『京都大学百年史 写真集』「京都大学百年史写真集」頒布事務局。

-
- 大谷大学百年史編集委員会編 2001年『大谷大学百年史』大谷大学。
 - 川上貢監修 2007年『歴史を語る産業遺産・近代建築物 ー京都の近代化遺産ー』淡交社。
 - 増田彰久著 2007年『西洋館を楽しむ』筑摩書房。